

Chr.W. ドームと M. メンデルスゾーン

— 18 世紀ベルリンのユダヤ啓蒙主義 —

渡邊 直樹

はじめに

啓蒙主義者ゴットホルト・エーフライム・レッシング (Gotthold Ephraim Lessing) が宗教的寛容をテーマとした劇『賢者ナータン』(Nathan der Weise) を書いたのは 1779 年である。プロイセン王国の官吏であったクリスティアン・ヴィルヘルム・ドーム (Christian Wilhelm Dohm) の『ユダヤ人の市民としての地位の向上について』(Über die bürgerliche Verbesserung der Juden) がベルリンのニコライ (Friedrich Nicolai) 書店から出版されたのは 1781 年のことである。このドームの著書が反ユダヤ主義者ヨーハン・ダーフィット・ミヒャエーリス (Johann David Michaelis) とユダヤ人哲学者モーゼス・メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn) との間で論争となった。この論争を切っ掛けとして、メンデルスゾーンは抑圧されて来たユダヤ人の権利とユダヤ教に関わることになる。アムステルダムのラビ、マナッセ・ベン・イスラエル (Manasseh Ben Israel, 1604 -1657) による英語の著書『ユダヤ人の救済』のドイツ語訳 Rettung der Juden を友人マルクス・ヘルツ (Marcus Herz) に依頼し、これにドームの著書に関する「パンフレット」(Broschüre) あるいは「付録」(Anhang) と題する「序文」(Vorrede) を付して 1782 年 4 月に出版する。この『ユダヤ人の救済』はすでに 1656 年にロンドンで出版され、1708 年に再版されたユダヤ人の古典的弁明書であった¹⁾。メンデルスゾーンは、1290 年にイギリスで起きたユダヤ人追放に対する告発の書をこの時期に改めて紹介する価値があると判断した。さらに、これへの反応を見極めて再度 1783 年に『イエルーザレムあるいは宗教的権力とユダヤ教について』(Jerusalem oder über die religiöse Macht und Judentum) を書く。ドイツの底辺でくす

ぶり続けて来たユダヤ人とユダヤ教の問題は、18 世紀のプロイセン王国の発展と啓蒙主義の時代精神と相俟って社会的精神的論争テーマとなり得たのである。

フリードリヒ 2 世治下のベルリンでは啓蒙主義が実践され、プロテスタントに、より寛大な施策が採られていたとはいえ、レッシングの指摘通り²⁾、一度宗教論争が生じると彼は啓蒙のヴェール剥ぎとり、その専制振りをあらわにした。しかし、このベルリンでドイツ啓蒙主義はユダヤ人に関する活発な議論を促した。この点でレッシング、ドーム、メンデルスゾーン、ミヒャエーリスの著作と彼らの間の論争が大きな意味をもった。わけでもプロイセンの官吏であったドームの著作がこのことに与って力があつた。

事実、ハープスブルク帝国のヨーゼフ 2 世がドームの『ユダヤ人の市民としての地位の向上について』が出版された直後の 1781 年 10 月にボヘミア居住のユダヤ人に、1782 年 1 月にはオーストリアのユダヤ人に市民としての権利に関する寛容令を公布している。

ドームはユダヤ人迫害の歴史を研究し、道徳的観点から彼らの正統な権利を擁護しようとしたばかりではない。むしろプロイセンの官吏として、行政的あるいは法的観点から客観的に彼らの社会的権利を改善することの必要を説いた。

本稿の目的は、ベルリンのユダヤ人とそのコミュニティをめぐるドームの思想と彼の著書が果たした役割をプロイセン国家の発展と啓蒙主義の時代精神を踏まえて検証することにある。18 世紀後半のベルリンのユダヤ啓蒙主義はユダヤ人の側からみると、ユダヤ教の厳格な律法と規律からの内的精神的解放が課題であり、他方ドイツ社会か

ら見ると、ユダヤ人とユダヤ教に対する偏見という外的障害の除去、すなわち同化政策が課題であった。換言すれば、これらの課題はユダヤ人にとってはキリスト教徒ドイツ市民との一体化を意味するものであり、ドイツ人にとっては彼らに市民としての政治的社会的権利を保証し、その見返りとして義務の履行を迫るものであった。そして、ユダヤ人の公民としての権利は、本来これら両者の一致の上に、啓蒙主義的成果として成立するはずのものであった。しかし、ユダヤ教とキリスト教の宗教的相違はこの同化政策の矛盾点をむしろ暴露するものに他ならなかった。

(1) メンデルスゾーンとレッシング

メンデルスゾーンはベルリンで哲学者としてドイツ人と同等の評価を受けていた。ドームは彼を慕う友人でもあった。レッシングはこのメンデルスゾーンをモデルとして『賢者ナータン』を書いたといわれる。ドームは当然レッシングの『賢者ナータン』が有する宗教的寛容の意味をはっきりと理解していたし、メンデルスゾーンのユダヤ啓蒙主義を少なからず支援していた。そして、それ以上にドイツ社会のユダヤ人に対するいわれなき中傷をこれら両者は批判的に洞察していた。

メンデルスゾーンはレッシングと同年の1729年にデッサウのユダヤ人居住地区にトーラー書記のメナヘム・ハイマン・メンデル (Menahem Haiman Mendel) の息子として生まれた。1743年14歳のとき、彼はベルリンに向かう。ベルリンにはユダヤ人居住地区があり、1730年から1746年までの統計で見ると納税戸数が186から444までになり、ユダヤ人戸数が2093という記録がのこる。数の上から見てもまた影響力から見てもユダヤ人の社会的地位がすでに注目される傾向にあったことがわかる³⁾。ベルリンには、ユダヤ人経営の絹織物、綿織物、貴金属加工などのリスクを伴うが収益率の高いマニュファクチュアが存在していた⁴⁾。しかし、ユダヤ人はドイツ人と同等の市民ではなく、いまだ料金を支払って保護状をもらう保護市民にすぎなかった。後に、ベルリンで名声を得たとはいえメンデルスゾーンもこの保護ユダヤ人として制限付きの滞在許可証をもつに過ぎなかった。

メンデルスゾーンは15歳になったおり、一般の

ユダヤ人のようにイデュッシュ語ではなくドイツ語を学ぶことによって、ユダヤの伝統とは異なる道を選択した。ユダヤ人にして啓蒙主義者であった彼はイデュッシュ語ではなく、ドイツ語で著作した哲学者となったのである。それだけにベルリンにおいてドイツ社会とユダヤ人社会双方に困惑をもって迎えられていた⁵⁾。

ベルリンで、メンデルスゾーンは多くの啓蒙主義者を知る。その中に生涯の友人となるレッシングがいた。レッシングは喜劇『ユダヤ人』(Die Juden, 1749)を書き、ベルリンですでに名前が知られていた。もちろんこの劇は「キリスト教徒であるならば、深い敬意の目をもって見なければならぬ民族に対し恥ずべき軽蔑と抑圧を加えるドイツ社会の、ユダヤ人への偏見を告発する⁶⁾」書であった。

レッシングは、一方でメンデルスゾーンの哲学的思索の成果である『哲学談義』(Philosophische Gespräche, 1755)の公刊を援助している。そして、これはユダヤ人が初めてドイツ語で書いた記念すべき著作となった。1746年当時ユダヤ人がドイツ語の本をもっていったという理由だけでユダヤ人コミュニティから追放された時代である。二人はまた共同で『形而上学者ポープ』(Pope, ein Metaphisiker, 1754)を出版した。メンデルスゾーンはユダヤ人の聖書モーセ五書と詩篇までもドイツ語に訳すという大胆な企てを行い、当然この行為は正統派ユダヤ教徒からの批判を招くこととなる。キリスト教社会からのみならずユダヤ人社会からも異端視されたメンデルスゾーンであったが、彼はユダヤ教徒であり続けた。彼の理性宗教的普遍精神が、信仰や宗教を超えて終生続いたレッシングとの友情の思想基盤であった。レッシングの死に際して、メンデルスゾーンはこう語った。

「私の魂を形成してくれた一人の男と引き合わせてくれた神の摂理に対し、心から感謝します。私が行動するいかなるときも、私が執筆するいかなる文章も、批評家としての彼を意識します。……彼はこれ以上高くのぼることができなかったのです。彼は自分の世紀よりも一世代以上も先立って逝ってしまったのです⁷⁾。」

啓蒙専制君主と言われたフリードリヒ2世の政治は、プロイセン王国に有益な限り自由な学問的

雰囲気奨励することになった。1763年ベルリン科学アカデミーは懸賞論文に応募したメンデルスゾーンの『形而上学の学問における明証性について』(Abhandlung über die Evidenz in metaphysischen Wissenschaften, 1764)に一席を与え、カントは二席であった。この事実は、ベルリンのドイツ社会が学問的・文化的領域においてユダヤ人の能力を公正に評価し、かつ平等に受入れていたことを示している。確かにメンデルスゾーンの個性が特殊な輝きを放っていたとしても、フリードリヒ2世支配下のベルリンは啓蒙主義的で自由な雰囲気があり、ユダヤ人アレルギーが絶対のものではなくなってきた。

一般に7年戦争がベルリンの土地所有を基盤とするプロイセンの貴族社会の崩壊とギルド制度にかわる市民企業家の勃興を促すことになった。ユダヤ人コミュニティにおいてもこうした潮流が生まれていた。つまり、戦争によってプロイセンの金融政策に協力した金融業者や軍需品調達に力があつたユダヤ人は、それ以前に比べてはるかに裕福になることによってドイツ人社会と接点をもつことができた。そして、このことはユダヤ人コミュニティとドイツ人社会とを隔てる壁を確実に低くした。もちろん大部分のユダヤ人はキリスト教徒ドイツ人とは隔絶されたコミュニティに貧しい暮らしを強いられていた。

(2) クリスティアン・ヴィルヘルム・ドーム

ドームは1751年に生まれ、1820年に没している。レッシングとメンデルスゾーンより約20年時代が下ることになる。この間のドイツ社会は7年戦争からフランス革命を経て、ナポレオン支配、そしてウィーン会議へといたる時代の経過のなかで神聖ローマ帝国の崩壊やドイツ連邦の始まりなどドイツ内部で政治的変化を経験する。

プロイセン王国の首都ベルリンでは人口が1700年頃の10万人から1800年頃には19万にまで増加した。そして、フリードリヒ2世の東方への植民政策が示すように、官僚や外交官にも招聘者あるいは志願者を必要とした。ドームもプロイセン王国の高官となった1人である。彼は北西ドイツ、リッペ州のレムゴーという小邑の出身であり、この町はウエストファリア帝国伯爵領であつた。こ

こを統治したズィーモン・アウグスト(Simon August)伯は絶対君主ではあつたもののフリードリヒ2世同様に啓蒙主義に基づく政治を理想とした。元々ハンザ同盟都市として商業で繁栄したが30年戦争により打撃を受け、その後は北西ドイツの港町がそうであつたように、知的で教養ある市民層が力を得て本の出版や編集など文化的教養都市として有名になった。

ドームはライプツィヒ大学で神学を修めるが、その後ゲッティンゲン大学に移り哲学、歴史、政治学を学び、キリスト教の非ドグマ的観念を研究することによって啓蒙主義神学に傾倒する。一方、教育者バーゼドー(Johann Bernhard Basedow)の知己を得ることによって教育運動に接近し、さらにガルヴェ(Christian Garve)、フォン・ヴァイセ(Christian Felix von Weiße)、エンゲル(Johann Jakob Engel)、ツォリコーファ(Georg Joachim Zollikofer)らの哲学を通して道徳的美学的諸問題に関わることになる。イギリス人ロック(John Locke)やヒューム(David Hume)の道徳哲学、政治経済学を研究するのも彼らの影響の下にあつたためであろう。そして、ドームは大学での学生生活というよりも、啓蒙主義を掲げた協会での社交や読書、学者たちとの交流によって時代の雰囲気とともに実際の知識を身につけた。

1772年ドームはベルリンに赴く。ここで、彼はズルツァー(Johann Georg Sulzer)、ニコライ、シュパルディング(Johann Joachim Spalding)、テラー(Wilhelm Abraham Teller)らと交わり、活発な著作活動にはいる。このなかでとりわけ重要な出来事は、ヨーハン・アントン・ビュシュング(Johann Anton Büschung)との出会いであり、彼の旅行記の翻訳を通して東インド地域の歴史、道徳、宗教、法律などについて包括的知識を得たことである。ドイツ以外のアジアに関する知識によって、ドームは現実のヨーロッパ諸国の政治経済社会への批判的視点や啓蒙主義的思想基盤の一部を形成したと推測できる。

しかし、安定した職を見出せなかつたドームは新興の大学都市ゲッティンゲンに赴き、法律、統計学、近代史を研究する。そこで、シュレツァー(August Ludwig von Schlözer)、ピュター(Johann Stephan Pütter)、ベーマー(Caroline Böhmer)、ベッ

クマン (Johann Christoph Beckmann) らと交わる。そして、1768年に第一巻が出版されていたユストゥス・メーザー (Justus Möser) の『オスナブリュック史』(Geschichte der Osnabruck, 1768-80)に出会う。ゲーテも読み、ドイツ社会に巣くう問題点を適切に抽出し革新的な社会改革を実現するための指南書とも見られたこの歴史書が、ドームの歴史意識を目覚めさせた。こうした知的彷徨を経たドームは作家、ジャーナリスト、出版者として時宜にかなった課題と対決することになる。

ドームは、この地で1774年から出版されていた『百科ジャーナル』(Encyclopädischer Journal)の編集を受け継ぎ、道徳的性向が勝ったこの雑誌を歴史や地理や統計を盛る科学的内容に変えていった。1776年から、ハインリヒ・クリスティアン・ボイエ (Heinrich Christian Boie) と共同で『ドイツ年鑑』(Deutsches Museum)を発刊する。同時に『東インドにおけるイギリス人とフランス人の歴史』(Geschichte der Engländer und Franzosen im östlichen Indien, 1776)を書く。これはゲッティンゲンがハノーヴァー・イギリス領であったこととも無縁ではないし、ビュッシングの旅行記やメーザーの歴史観とも関連があるろう。これによって、ドームはハレ大学の行政学の教授職か管理職に就こうと企図する。こうした行動の背景には、道徳的かつ経済的に有益である国家改革を促す議論に寄与しようとするドームの、合理的客観的学問に裏打ちされた啓蒙主義が見て取れる。

しかし、この願いは実ることとはなく、今度はカッセルに移り、神学校 (Collegium Carolinum) で財政学と統計学の講師となる。そこで、軍人でもあり作家でもあったヤーコプ・マウビロン (Jacob Mauvillon)、ゲオルク・フォルスター (Georg Forster)、医師ゼンメリング (Thomas von Sömmering) らの知遇を得る。この時代の心情をドームはグラ임宛てに次のように書いている。

「私の状況はすばらしい。というのも、君主に自由を売り渡すだけで、いつも求める限りの自分の時間が与えられる…より広い分野に、ただの文筆業とは別の分野へ向おう⁹⁾。」こうしたドームの活動の精神的支柱は、ベルリン時代の知識人との交流や啓蒙主義思想に求められる。フリードリヒ2世が啓蒙的政治を行い、啓蒙主義者に多くの活動

の機会を与えていることがドイツの将来にとっても決定的に有効であることをドームは確信していた。彼がエアフルト大学の歴史学の教授職を断り、1779年にさして重要でも高給が支払われる訳でもないベルリンの州立文書館の特別調査官の職に就いたことも、このことを明らかにしている。後に、ここでの研究から「バイエルン継承戦争」

(Bayerischer Elbfogekrieg, 1779) や「ドイツ君主同盟」(Deutscher Fürstenbund, 1785)などの著作が生まれている。1785年には外交部に移り、ニーダーザクセン-ヴェストファーレン州の領事になる。

1807年以降、ドームはナポレオンの傀儡国家ヴェストファーレンに奉職する。彼の目的は旧型の愛国主義と対決するのではなく、新しい政権のもとで市民社会の福祉のために尽力することにあった。彼は啓蒙主義の意味において社会の進歩と発展を促す手段は法律、行政、教育であるという公共精神の持ち主であり、その政治的実現を迫及した。この意味で、ドームの功利主義的理神論はベルリンで彼が交わった多くの啓蒙主義者の世俗のプロテスタンティズムと一致し、福祉と幸福を実現するという国家の自然法的概念とも調和している。

ドームは、国家とは契約によって成立し、原則的には共和主義的でなければならないという思想を支持している。1781年フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ (Friedrich Heinrich Jacobi) 宛ての書簡はこのことを明らかにする。「たとえイギリス人、スイス人あるいは帝国市民として生まれても、プロイセン人にはならなかったろう⁹⁾。」ドームは、国家とは支配者と被支配者とが社会契約によって共生できる形態と見て、アメリカ合衆国への移住者やトマス・ペイン (Thomas Pain) の「良識」

(common sence) と見解を同じくしている。イギリスの政治的経済的發展はその立憲君主主義的憲法に大きく依存しているという認識は18世紀後半のイギリス経験主義から学んだドイツの啓蒙主義者の一致した見方でもあった。フリードリヒ大王の啓蒙絶対主義は「一般ラント法」の起草者や「水曜会」の多くのメンバー、官吏、それにドームやカントにとっても、絶対的権力に頼る政治ではなく法に基づいて市民社会が保証されるもので

あり、その限りにおいて承認することができた。専制的で理性に基づかない理不尽な国家の発展があり得ないことは、自然法の概念から見て当然であった。

人間は、自分たちの階級に相応しい義務と幸福とを国家と社会において見出し、階級的分化は人間の理性に対応する。つまり、社会の政治経済的概念の枠組みは氏素性によって決定されるのではなく、国家のなかで果たすべき役割によって決定されることが普遍的真理として認識されたのである。

(3) ドームの『ユダヤ人の市民としての地位の向上について』

ドームは、すでにプロイセン王国に仕えていた頃『ユダヤ人の市民としての地位の向上について』の著者として知られていた。ベルリンの啓蒙主義者の集まりでドームを知っていたメンデルスゾーンは、ドームがすでにディアスポラとなつて以来のユダヤ人の歴史に関心があり、歴史的社会的発展の理論に基づき国家や民族、交流や商業、歴史や法律に関する資料や情報を収集し研究する学者であることを顧慮して、アルザスのユダヤ人たちの活動を紹介するようドームに依頼している。このことは1779年にアルザスのユダヤ人たちの地位を貶めようとした陰謀事件の顛末を指している。この騒動を煽り立てたのが反ユダヤ主義者の地方裁判官ジャン＝フランソワ・ヘルであり、彼は「国家の中の国家¹⁰⁾」という表現を用いて、ユダヤ人が独自の司法権をもっているかのように弾劾したのである。ドームの『ユダヤ人の市民としての地位の向上について』の執筆はこれを一つの切掛けとしている。しかし、ドームはユダヤ教の理解者としてあるいはユダヤ人の友人として、つまり同情とかユダヤ人に対するドイツ社会の不当な扱いへの批判からこの本を著したのではない。プロイセンの官吏であったドームの著作目的は、政治的法見地あるいは実際的な国家利益の見地からユダヤ人の市民としての権利を科学的に考察しようとしたものである。ドームは冒頭こう述べる。「ヨーロッパの偉大な国家の政府は、人口が絶えず増加することが普遍的福祉のための最も本質的な条件であるという原則で一致している。人口が常に増

加傾向になれば、市民社会をより安全に保つことも、外国からの攻撃に対して自国を防衛することもできないし、農業生産物の増加や改良も期待できない。国家間の交易によっても利益をもたらすこともないし、工業や市民の普遍的福祉をより確実なものとすることはできない¹¹⁾。」一方で自由主義的経済理論に、他方啓蒙主義の人文主義的理想に基づくドームの論文は、国家の経済状況に対するユダヤ人の「有益」な役割と、あらゆるキリスト教国でユダヤ人が服している「例外法」(Ausnahmegesetz)の廃止とを論じたものである。

メンデルスゾーンも関与したこの著書においてドームが扱った問題はプロイセン王国におけるユダヤ教とキリスト教のそれではなく、宗教としてのユダヤ教の承認とユダヤ人の権利の確保であった。メンデルスゾーンは1777年ドレーズデンから退去を求められたユダヤ人コミュニティからの調停の依頼について君主や当局への慈悲に訴えたが、国外追放の合法性あるいは不当性についての議論を興すところにはまで至っていない。メンデルスゾーンは、いまだ国家の枠組みにおいてユダヤ教とユダヤ人とそのコミュニティの存在意義について発言しようとはしていない。そもそも、キリスト教徒のユダヤ人への要求は彼らの道徳に対するものであり、このことは法的平等に関する議論に先立つものであった。後にプロイセンの官吏となるドームにとって、この意味でまず当時ユダヤ教の信仰の自由をめぐる宗教的課題の解決よりも、キリスト教徒ドイツ人社会に現実に存在しているユダヤ人とそのコミュニティそのものがもつ問題が整理されるべき焦眉の課題であった。この後で初めてユダヤ人の権利に関わる問題が議論の端緒につくことができた。

ドームはただ単に「抑圧されているユダヤ人たちのことだけではなく、人類と国家」の根源を主題としている。「私はユダヤ人に同情の気持ちを抱かせようというのでも、人類と国家についてよりよく扱おうというのでもない。市民社会の利益同様に健全な理性と普遍的人間性がこうした扱いを要求していることを示したいのである¹²⁾。」ドームにとってはユダヤ教とユダヤ人の運命と現実とが問題であるというよりも、社会で無視できない役割を果たしているユダヤ人が、たとえ時間がか

かろうとも「よりよく処遇されることによって市民社会の発展にともに参加し、そのことによって尊敬され、社会の有用有益な構成員となる¹³⁾」ことを証明することが重要であった。ドームは、いわば政治哲学者として道徳的客観的歴史的観点から、いわば人間の権利という普遍的原理からユダヤ人がおかれている状況を認識しようとした。

従って、ユダヤ人コミュニティとドイツ人社会との関係が扱われるべき対象であり、ユダヤ教とキリスト教のそれではなかった。宗教的寛容というよりも市民権の問題であった。ドームはユダヤ人にキリスト教徒市民と同等の権利を与える前提は国家の政治と教会との分離を、つまり第一にユダヤ人にもキリスト教徒市民と同等の義務と法の遵守を要求した。また、ユダヤ人に職業や生業の自由を与えることと引き換えに、ユダヤ人コミュニティに宗教活動の自由を要求した。いわば自然法に基づく人間としての権利を与える見返りとして、義務の履行をユダヤ人にも求めたのである。

「国家と宗教、市民的秩序と宗教的秩序、世俗の事柄と教会の事柄など社会生活のこうした支柱を相互に対比し釣り合いがとれるようにすること¹⁴⁾」がドームの出発点であった。

ドームが国家と宗教との分離を主張した理論的基盤は「宗教的権力」であった。宗教の信仰は内的精神的行為であり、外的社会的行為へと発展しない限りは人間個人の思想の自由として保証される。政治的行為は法律に違背する限り刑罰対象となるが、宗教的活動は罰せられることはない。ドームは、ユダヤ人とユダヤ人コミュニティに対して法に従い行動することを要求することによって、当局にも宗教的寛容を権利として承認するよう求めたのである。この点においてキリスト教への改宗や同化政策を目的とはしていない。

一方、メンデルスゾーンは後に国家と宗教との関係を次のように定義した。「一言でいえば、市民社会は道徳的人格に関して強制法を維持し、社会契約によってそれを実際に行使することができる。それに対して、宗教的団体は強制法を要求することも、この世界で契約によって強制法を維持することもできない¹⁵⁾。」社会的合法性と精神的内面性の区別は、社会秩序と人間精神の問題として中心的議論の一つであった。人間の内面は国家権

力からは保護されなければならないし、国家権力が介入できる性質のものではなく、国家が服従や罰を与える権利などないことが普遍的法的真理である。メンデルスゾーンも宗教としてのユダヤ教への寛容をプロイセン国家に要求している。

ドームは『ユダヤ人の市民としての地位の向上について』において、法に則った市民としての権利の付与が宗教・教会に関わる事象を制約する可否かの問題を扱い、ユダヤ人にはモーセの律法と宗教的伝統に従って生きることが要求され、これらを法として裁判がなされなければならないし、また、実際行われているとドームは主張した。これに対してメンデルスゾーンは『宗教的権力とユダヤ教について』において次のような見解を表明している。司法権は一切教会から取りあげられなければならない。「教会の権限、教会の権威、教会の権力。正直言って、私はこうした表現についてはっきり理解できない。……宗教の教説とかかわるような、あるいはそうしたものに依拠した事柄や権限などというものは私にはわからない。……宗教が教え、教会のものである教説に対して権限があるとか権力をもつかいことは、私に一番理解できないことである。……根拠をもって人々を得て、納得してもらい、話して理解してもらうことによって幸福にするという力、それ以外の力を宗教は知らないはずである¹⁶⁾。」この意味で、メンデルスゾーンはユダヤ教に破門を失くすよう要求する。この根底には政治的理由が認められる。つまり、国家が宗教的事項に関与できないのと同様に教会には強制権はないというのである。宗教的強制力がないとすれば、教会による破門という制裁は意味を失う。

この意味で、確かにメンデルスゾーンもドーム同様にユダヤ人の人間としての自然権を政治的法的現実には照らして救済しようとしたということが出来る。しかし、ドームの立場が官吏として、あくまでも啓蒙主義精神に裏付けられた普遍的権利を根拠としての主張であったのに対して、メンデルスゾーンのそれはユダヤ人コミュニティにおけるユダヤ人のための、ユダヤ人独自の、ユダヤ人による解放への指針であった。国家官吏としてのドームの現状認識とユダヤ啓蒙主義を目指すメンデルスゾーンとの間の現実のユダヤ人の権利獲得

への方法的相違は、宗教と政治というアクチュアルであると同時に原理的根本的課題を提起していた。国家と宗教の問題は、マジョリティであるキリスト教徒国家とマイノリティであるユダヤ教徒コミュニティという決して和解し得ない原点に常に行き着くことになる。

ドームは、従って「ユダヤ人の市民としての地位の向上」の必要性を平等にユダヤ人の側にも求めた。そして、ユダヤ人の悲慘はキリスト教徒の側にその多くを負うとしても、ユダヤ人の側にも普遍的義務の遂行を要求した。たとえば、教育によって双方への偏見が除々に取り除かれる必要があること、そのことが最終的に相互理解と寛容とを導くことを訴えた。また、職業についても能力次第でドイツ人と同じく土地を有し農民や職人にもなることができるように、また公務員として責任を負うことが出来るように国家に要請した。そして、ユダヤ人たちを国家が受け入れ、彼らの能力を適切に引き出せば、国家にとっても大きな利益となることを説いたのである¹⁷⁾。しかし、マイノリティであるユダヤ人の側から見ると、ドームの要求の実現はマジョリティであるドイツ人国家に責任があった。

国家と宗教の問題はユダヤ教信仰の本質的部分を含むものであり、それは必然的にキリスト教徒市民の国家とユダヤ人コミュニティとを隔てる根本的要因であった。

(4) ドームとユストゥス・メーザー

ドームは、ビュッシュングの旅行記の一部を1776年から78年にかけて『ドイツ年鑑』に政治学や統計学を利用し論文の形で発表している。一方、1777年から『統計学と国家の歴史のための諸資料』(Materialien für die Statistik und neuere Staatsgeschichte)という題目で、知られていない外国の内政・外交やドイツの政治が模範とすべき知識を紹介している。その際、彼は客観性を義務として、正すべき諸点を読者への判断に任せる方法を採用している。プロイセンの利益に適う科学的かつ実際的研究姿勢は、むしろ彼がユダヤ人問題もこうした観点から把握しようとしていた方法を明らかにする。

啓蒙主義の政治的著作一般がそうであるように、

ドームは経済、社会、政治的現実に関する検閲なき情報、人口や生産高についての報告、自治体の規定や裁判についての周知を扱った。しかし、ドイツでは信頼にたる情報の入手が困難であることも彼にはわかっていた。イギリスやフランスの経済政治状況はドイツの景気動向や後進性を指摘することとも絡んで報告する義務を感じたし、スペインについては、その間違った経済政策を示すこともした。読者の注意を自国に向けさせることは、統治者に世論を考慮させる手段であった。統治者の利害と非統治者のそれは政治に責任を負う官吏としてのドームにとって一体のものとして認識された。この両者を啓蒙することが、教育者であると同時に啓蒙主義を基盤とする作家としてのドームの義務であり、有益で実際的かつ価値ある知識を提示することでもあった。

ドームは、この意味でプロイセンの教育大臣フォン・ツェートリツ(von Zedlitz)の『君主国家における国民の教育制度について』(Über die Einrichtung einer Volkslehre in einem eigentlich monarchischen Staat)の論文を紹介し、国民の教育の必要と教養の促進を提言している。

国家による教育と国家の発展の間には密接な関係があり、国家の構成員である国民は自己利益の一部を国家への奉仕・義務として還元すべきであるという思想は、ドームばかりではなくオスナブリュックの官吏ユストゥス・メーザーにその原理が認められる。国家への義務と個人の権利は相互補完的であり、国家存立の原理の一つとしてみなされていた。

ドームはすでにゲッティンゲン時代に知ったユストゥス・メーザーの仕事に格別興味を抱いていた。メーザーが自分と同じ官吏であると同時に政治や啓蒙主義において意見を共有していると考えたからであろう。メーザーは1720年に北ドイツの町、オスナブリュックに生まれ94年にこの地に没している。当時のオスナブリュック司教領全体の人口は11万7千、オスナブリュックは6千を数えたに過ぎない。彼はこの司教領の官吏として、イギリスに戴いた国王のかわりに実質的政治を取り仕切った人物である。イエーナとゲッティンゲンで法律を学び弁護士でもあった。メーザーは啓蒙主義者として政治を国民のものと理解し、この

思想に則った政治を心がけた。彼は政府の広報誌を発行し、いわば政治・社会についての評論家としても活動した。それらがまとめられた『祖国愛の幻想』(Patriotische Phantasien, 1774-86)について、ゲーテは『詩と真実』(Dichtung und Wahrheit)でこう褒め称えている。「公益に関する対象の選択、深い洞察、自由な展望、巧妙な取り扱い、徹底的かつ絶妙な諧謔などの観点からすれば、私はフランクリンの他に彼と比較できる人を知らない¹⁸⁾。」(第13章)ドームが紐解いた『オスナブリュック史』は、「改革的保守主義」¹⁹⁾といわれるこのメーザーの歴史思想を明確に表わしている。

メーザーは『オスナブリュック史』の序文で「私が考えるところ、ドイツの歴史は一般土地所有者をほんとうの国民の構成要素としてみなし、彼らの変化から研究するならば、全く新しい方向付けが期待できる²⁰⁾」と規定し、土地を尺度として歴史を概観すると「はるかに秩序立って明確に国民の起源、発展、その多様な諸相を変化に即して把握できる」²¹⁾と述べる。このような土地所有と共同体の権利・義務が、国家構成員の権利・義務へと発展する。プロイセンの官吏シュタイン(Karl von Stein)が農民の解放にあたり、生産性よりも中層農民の拡大と維持に力点を置き、一方、都市の自治に関しては政治の担い手を「市民権」所有者に限定したのも同じ思想基盤によると見ることができる。

ドームがこのメーザーの「市民権」の思想をベルリンのユダヤ人とそのコミュニティに当てはめて考えたとも見ることがあながち不当なことばかりはいえない。ユダヤ人がドイツ人同様の市民としての権利を持ちうるためには、一方で義務を負わなければならないことは当然であり、その主たる義務はキリスト教徒と宗教的社会的慣習を共有しなければならないことであった。

(5) ベルリンのユダヤ人の「地位の向上」

ベルリンでは7年戦争以降ユダヤ人と非ユダヤ人、ユダヤ教徒とキリスト教徒との間に少なからず交流が生まれていた。この点から見ると、ユダヤ教の堅固な律法はユダヤ人の生きる支えであると同時にくびきともなっていた。

モーゼス・メンデルスゾーンの長女であり、

1783年ユダヤ人銀行家ジーモン・ファイト(Simon Veit)と結婚し、その後フリードリヒ・シュレーゲルと駆け落ちしたドロテア(Dorothea Veit)の不幸について、友人で一歳年長であったヘンリエッテ・ヘルツ(Henriette Herz, 1764-1847)は、彼女がユダヤ人社会の秩序の犠牲となったと批判している。ヘンリエッテは15歳のとき、30歳の医者マルクス・ヘルツ(Markus Herz)と結婚し、社交においてその振る舞いと教養に秀逸なユダヤ人女性であった。1779年に『プロイセン王国をめぐる一旅行者の手記』(Bemerkungen eines Reisenden durch die Königlich Preussischen Staaten)という匿名の作者の著書に当時の裕福なユダヤ人の様子が描かれている。「ベルリンには非常に金持ちのユダヤ人たちがいる。その中には工場を営んでいる人もいる。しかし、たいいていの人々は商業により生計を立てている。彼らの態度は上品で丁寧であり、確固たる信念に基づいて教育を受けた人たちはキリスト教徒とも親交がある。時には彼らは外見からはユダヤ人であることがわからない。…彼らのなかにはモーゼス・メンデルスゾーンやヘルツ博士のような学者もいる…ベルリンではイスラエルの婦人たちが特別な役割を演じており、彼女らのなかにはほんとうの美人がいる²²⁾」ヘンリエッテのサロンは夫ヘルツが1803年に死去したあとも引き続きベルリンのユダヤ人の精神的支柱となった。

フランス革命を推進した政治家ミラボー伯爵(Honoré Gabriel Victor Riqueti Mirabeau, 1749-91)が1787年にベルリンにやってきたおり、ヘンリエッテやドロテアらのサロンに招かれている。そして、ドームのユダヤ人についての論文をフランスに紹介すべくその翻訳を試みた。「市民権が得られるためにはどれほどの期間その国で暮らさなければならないのか。因習よりも尊いはずの自然の権利は存在しないのだろうか。ヒューマニティの原理は、つねに健全でしかも善良な政治の原則と一致しているものである。ユダヤ人に祖国を与えよう。そうすれば、彼らは祖国を愛することになる²³⁾。」革命の進行とともに、フランス国民議会は1791年9月28日ユダヤ人に無制限の公民権を与えた。ユダヤ人は完全なフランス国民の一員となった。ドームの「ユダヤ人の地位の向上」

は、フランスにおいて市民権と国家への帰属権の獲得という形でその実現を見たのである。

ドイツにおいては、1804 年以来バイエルンでユダヤ人の子どもが公立学校に通えることになった。プロイセンではフォン・シュタインが等族制を採用した 1808 年から、ユダヤ人は市民と同等の権利を有することができたし、1812 年 3 月 12 日付け国王のユダヤ人勅令により、彼らはプロイセン国民となることができた。1813 年からはユダヤ人は国民として扱われた。しかし、ドイツ人ではなく、義務の割に与えられた権利はわずかであった。結婚には相変わらず警察の許可が必要であり、ギルドはユダヤ人を受入れることはなかった。

ベルリンのユダヤ人の市民としての権利の改革は、彼らの社会的役割と地位とが向上するに従い、広く当然のものとして認知されるようになっていった。ヘンリエッテのサロンの常連でもあったヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt) は「キリスト教徒の義務をすべて満たそうとするユダヤ人がなぜ権利にもそれ相応に与えることが許されないのか、これはどのような法的根拠もない²⁴⁾」と述べた。一方、メンデルスゾーンの友人であり、絹糸工場経営者のダーフィット・フリートレンダー (David Friedrender) は 1812 年プロイセン国王に宛てて次のような書簡を認めている。「今や私たちには一つの祖国プロイセンしかありません。ただ、この祖国のために私たちは祈りを許されているのです。私たちの母国語はドイツ語です。この言葉を祈りの中に取り入れることによってのみ、私たちの礼拝は新たな生命として蘇ることができるのです²⁵⁾。」宰相ハルデンベルク (Karl August Hardenberg) は 1815 年にこう述べた。「ユダヤ人たちが国家への忠誠ということでは他に抜きん出ていることを戦争の歴史が証明した。ユダヤの若者たちはキリスト教徒の同胞たちであった。彼らの中には真の英雄行為をなし、また他のユダヤ人住民、特に婦人たちは犠牲的精神をもってキリスト教徒に協力した²⁶⁾。」

国家の発展に共同責任があると自覚したユダヤ人は、その自立的活動の場を探し求めた。しかしながら、キリスト教徒に対しても基本的市民権さえ与えられていない状況にあった多くのドイツ領邦にあって、少数派のユダヤ人に対して市民とし

ての権利を保障することの理解が得られるはずはなかった。

フランスとは違い、ドイツでは公民権と国民的帰属は完全に区別されて扱われた。ユダヤ人はドイツで市民権は得られたとしても、国籍は相変わらず与えられないままであった。ナポレオン支配への反抗からドイツに愛国的風潮が生まれ、ロマン派先導による民族意識の覚醒が促されたためか、なぜかこの時期ユダヤ人のキリスト教への改宗者が増えた。政治的自由主義者であり、ユダヤ人のために政治批評を書いたルートヴィヒ・ベルネ (Ludwig Börne) は 1818 年に、ヘンリエッテ・ヘルツは 1817 年に、プロテスタントに改宗し、ドロテア・シュレーゲル (Dorothea Schlegel) はさらにカトリックへと改宗した。しかし、この結果は彼らの精神にも、ドイツ社会にも何らの新しい変化をもたらすことはなかった。彼らは何らかの意図をもって改宗したのとは裏腹に、ユダヤ人からみれば改宗者はもはやユダヤ人ではなく、キリスト教徒からみれば彼らは相変わらずユダヤ人に過ぎなかったからである。自分たちのアイデンティティの本質的部分を放棄してしまった彼らにとって、人生の拠り所となるものはすでになくなっていった。1825 年に改宗したハインリヒ・ハイネ (Heinrich Heine) はその真情をこう吐露した。「私は今やキリスト教徒にもユダヤ教徒にも憎まれている。私は洗礼を受けたことを非常に後悔している²⁷⁾。」

ユダヤ人は自分たちをドイツ人であると意識し、自分たちの文化をドイツ文化と見なそうとした。しかし、たとえ彼らのドイツ文化への貢献が大きいものであり、大いに評価されたとしても、それが文学にせよ、芸術にせよ、科学にせよ二つの伝統あるいは知識人たちの出会いの産物として解釈されることは不可能であった。なぜならば、ユダヤ・ドイツ文化はユダヤ精神の世俗化とドイツ文化への適応から生まれたが、結局のところそれらはユダヤ性の独自の形象化として見なさざるを得なかったからである。そして、彼らは常に孤独であったし、彼らを迎え入れ、対話しようとするドイツ人とドイツ社会は根本において見出すことはできなかったからである。

ユダヤ人のドイツへの同化姿勢は、結局のどこ

ろドイツ性によって代替されることはなかった。共生はあっても溶け合い、統一されることはなかった。法的に公民権が認知されることと精神的にドイツ文化へと同化することとは全く別の次元に属していた。確かにキリスト教に改宗したユダヤ人知識人たちの行動は、社会的にも精神的にもドイツへ同化しようという願いの現われとみることができる。しかし、彼らはどちらの社会からも拒絶される孤独と失望を味わわされることになった。

むすび

18世紀中葉以降ドイツで議論の対象となったユダヤ人の市民としての地位の向上あるいは権利付与の問題は、確かに一部裕福なユダヤ人のドイツ社会への接近を招いたものの結局のところユダヤ人と彼らのコミュニティがドイツ人と同等の市民として権利を承認されるまでにはいたらなかった。ユダヤ人の側からすれば人間の普遍的自然権として、国家建設や政治への参加が承認されるべきはずのものであったが、事実は権利と比較して容認し難いユダヤ教の宗教的本質にかかわる部分に対するドイツ社会の同化要求がこれを不可能なものとした。このために、ユダヤ人たちは何よりも改宗によって精神的に市民権を獲得したと信じることで満足するしかなかった。現実のドイツ国家とキリスト教徒、これと同じ地平で宗教的権力と国家とを考量するとき、ユダヤ教には克服しがたい律法という宗教的権力が存在していた。ユダヤ教への信仰は、その信仰が篤ければ篤いほど、根本において個人の思想を超えて宗教的律法に服従する義務を負うことになる。ドイツ人キリスト教徒国家とユダヤ教信仰とを顧慮すれば、宗教的権力をめぐって両者が妥協することは困難であろう。従って、ユダヤ人たちにとって、必然的にキリスト教への改宗によってしかドイツ人社会へ同化することはできない。

ドームの『ユダヤ人の市民としての地位の向上について』は、公民権に関する啓蒙主義の法理論的体系の一つとして確かに存在したが、それは実現されることがなかった。しかし、18世紀中葉のドイツにおけるユダヤ人とユダヤ教に関する問題点を整理し、それらを国家行政と法的側面から解

決しようと試みたところに歴史的意義がある。ドームにとって「ユダヤ人の地位の向上」は、根本的には社会全体の進歩の一部であり、その解放の目標はユダヤ教を宗教的寛容をもって公認するというよりも、ユダヤ人にドイツ人同様の市民としての権利を与えることによって義務も与え、国家建設と市民社会への参加を促すこと、いわば同化主義であった。一方、メンデルスゾーンとレッシングの啓蒙主義的努力は、人間個人の信仰を絶対としてユダヤ教とキリスト教の双方に宗教的寛容を要求するものであり、人間としての権利の主張であった。

この時代精神にあってクリスティアン・ヴィルヘルム・ドームの「ユダヤ人の地位の向上」を目指した功績と努力は、宗教的信仰部分に配慮することがなかったがゆえに歴史に埋没せざるを得なかった。18世紀後半の一ユダヤ人女性の叫びに、この真実が見て取れる。「ドームは人間の良心に訴えたのだ。自分たちと同じ市民であるべきユダヤ人のためではない。ユダヤ民族に対してなんらかの絆を感じているがためですらない。啓蒙主義者の鋭敏な良心にとって、無権利な者が自分たちの間にいるとわかっていることに堪えられなくなったのだ。²⁸⁾」

注

(1) Manasseh Ben Israel: *Rettung der Juden*. Aus dem Englischen übersetzt. Nebst einer Vorrede von Moses Mendelssohn. Als ein Anhang zu des Herrn. Kriegsraths Dohm Abhandlung: *Üeber die bürgerliche Verbesserung der Juden*. Berlin und Stettin bey Friedrich Nicolai 1782.

マナッセ・ベン・イスラエルの初版のタイトルは次の通りである。*"Vindiciae Judaeorum, or a Letter In Answer to certain Questions propounded by a Noble and Learnd Gentleman, touching the reproaches east on the Nation of the Jevve; Wherein all objections are candidly, and yet fully clear'd. By Rabbi Menasseh Ben Israel a Divine and a Physician. Printged by R.D. in the year 1656"*

(2) Gotthold Ephraim Lessings *sämtliche Schriften*, hrsg. v. K.Lachmann, 3. Aufl., bearb. von Franz Muncker, 17.Bd., 1904, S.298.

- (3) エンゲルハルト・ヴァイグル『ベルリン ―ユダヤ啓蒙主義の首都』三島憲一・宮田敦子訳《思想》(岩波書店) 1995 年 12 月号、142 頁。
Asriel Schochat: *Der Ursprung der jüdischen Aufklärung in Deutschland*. (Campus Judaica, Bd.14.) Frankfurt/New York 1960, S.32-41.
- (4) エンゲルハルト・ヴァイグル、前掲書、143 頁。
- (5) 同上書、138 頁。
- (6) Gotthold Ephraim Lessing: *Werke*, Hrsg.v. Herbert G. Göpfert, 1. Bd. 1970, München, S.416.
- (7) Moses Mendelssohn: *Gesammelte Schriften, Jubiläumsausgabe*. Bd.13, S.11.
- (8) Wilhelm Gronau: *Christian Wilhelm von Dohm nach seinem Willen und Handeln*. Ein biographischer Versuch. Lemgo 1822. S.48.
- (9) 18. Dezember 1781. Zit.nach *Aus Friedrich Heinrich Jacobis Nachlaß*. Hrsg.von Rudolf Zöppe. Bd. I. Leipzig 1869, S.49.
- (10) *Observation d'un Alsacien sur l'affaire présente des Juifs d'Alsace*. Frankfurt 1779.
- (11) Christian Wilhelm Dohm: *Über die bürgerliche Verbesserung der Juden*, Erster Theil. Neue verbesserte Auflage. Berlin und Stettin, 1783, S.1.
- (12) Ebda., S.151f.
- (13) Ebda., S.152.
- (14) Moses Mendelssohn: *Gesammelte Schriften*. Jubiläumsausgabe. Bd.8. *Jerusalem oder über religiöse Macht und Judentum*.
- (15) Ebda., S.114.
- (16) *Vorrede zu Manasseh Ben Israel*, JubA Bd.8, S.18.
- (17) Christian Wilhelm Dohm: *Über die bürgerliche Verbesserung der Juden*.
- (18) Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Bd.16. Hrsg.v. Peter Sprengel München. 1985, S.631.
- (19) 坂井栄八郎『ゲーテとその時代』東京(朝日選書) 1966, 107 頁。
- (20) *Justus Möser's Sämtliche Werke: Historisch-kritische Ausgabe in 14 Bänden*. Bd.13. *Osnabrückische Geschichte*. Hamburg 1971, S.45-49.
- (21) 同上書。
- (22) Leo Sievers: *Juden in Deutschland*. Hamburg 1977, S.144.
- (23) Ebda., S.147.
- (24) Ebda., S.157.
- (25) Ebda.
- (26) Ebda., S.158.
- (27) Ebda., S.161.
- (28) ハンナ・アーレント『『ラーフェル・ファルンハーゲン』 ドイツロマン派のある女性の伝記』(大島かおり訳)。東京(平凡社) 1999, 13 頁。

Chr.W. Dohm und M.Mendelssohn

- Jüdische Aufklärung in Berlin im 18. Jahrhundert -

Watanabe Naoki

In dieser Abhandlung wird die jüdische Aufklärung in Berlin im 18. Jahrhundert behandelt. In diesem Zeitalter spielten G.E.Lessing, M.Mendelssohn und Chr.W.Dohm eine grosse Rolle in Bezug auf Probleme der Juden und des Judentums. Sie waren stets bemüht, nicht nur die Bürgerrechte der Juden zu verbessern, sondern auch die Ursachen der religiösen Feindschaft zu beseitigen.

Hier im besonderen handelt es sich um die Beziehung zwischen M.Mendelssohn und Chr.W.Dohm. Sie waren zwar befreundet, aber ihre Standpunkte waren unterschiedlich. Bei Mendelssohn ging es hauptsächlich um die Frage nach dem Verhältnis des Judentums zur christlichen Religion in Deutschland in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts.

Dagegen stellte Dohm die Frage nach den Bürgerrechten der Juden vom Gesichtspunkt des Naturrechts her. Seine Schrift "Über die bürgerliche Verbesserung der Juden" wurde nicht nur aus dem aufklärerischen Gedankengut heraus, sondern auch vom Standpunkt eines Beamten von Preussen geschrieben und hatte einen grossen Einfluss auf seine Zeitgenossen.

Es ist das Ziel dieses Aufsatzes, im Vergleich der beiden Standpunkte ein Bild der jüdischen Aufklärung im 18. Jahrhundert in Berlin zu entwerfen.